

平成 28 年度 第 1 回大学院経営セミナー 講演要旨

講師：東洋学園大学 准教授 八塩 圭子

演題：「女性が学び直すということ」

日時：平成 28 年 7 月 10 日（日曜日）

会場：東洋学園大学 本郷キャンパス 1403 教室

講師の八塩氏はキャリア・チェンジ、メタ認知、自己ブランドの 3 点に焦点を当て講演を行った。要旨は次の通りである。

キャリア・チェンジ

八塩氏は、上智大学法学部を卒業後、株式会社テレビ東京に入社し、記者を経てアナウンス室に異動となり、アナウンサーを務めた。経済ニュースを扱う番組も担当し、数多くの企業経営者との対談や、著名人へのインタビューといったメディアならではの経験を積んだ。第三者から見れば、キャリアの蓄積は十分なレベルに達していると考えるが、氏は担当のテレビ番組に出演していた大学教授の勧めで、大学院進学を決意する。その背景には、ある程度の期間一つのキャリアを積み重ねていったときに抱く苦悩があった。すなわち、メディアの一員として、また女性としての将来の方向性である。そうした苦悩を糧として氏は経営学修士号を取得し、その後のキャリア・チェンジを実現するのだが、大学院での学びから得られたものは学位だけではなかった。

メタ認知

氏は、大学院をスモールワールドと形容する。社会人大学院生のキャリアは多様で、年代も幅広い。そうしたキャリアをもとに一つの問題に対して意見を述べ合う授業は、それぞれが学生であると同時に教師でもある。様々な国、組織、時代に身を置いた人々の考え方は、まさに凝縮された世界を体現している。単に知らなかった知識を吸収できるだけでなく、それまで自己の中で完結していたはずの認識を、別な立場から認識することができたのだ。これこそがメタ認知である。心理学では、自分の行動・考え方・性格などを別の立場から見て認識する活動のことをメタ認知と呼んでいる。確かにフルタイム勤務と大学院通学の両立は、その過酷さからだけでも自己の鍛錬と知識の修得に役立ったであろう。しかし、修士号の取得だけを目的とするのではなく、学び直しにより学び自体に価値を感じられたことが、メタ認知につながったのである。そもそも、自らのキャリアを見直して、大学院進学を決意したきっかけも、自分を客観的に見るようになった、つまりメタ認知があったからこそと言える。

自己ブランド

メディアからアカデミアにキャリア・チェンジした氏であるが、現在でもメディアでの活動は続けている。いずれの分野を主としていても、「伝える」という行動は一貫している。「八塩ブラ

ンド」として見るならば、伝えるという「コアバリュー」を礎に、メディアからアカデミアにブランド拡張したという見方もできる。氏の大学院では「3 3 3の法則」があるそうだ。すなわち、大学院修了者の3割が昇給し、3割がキャリア・アップして転職し、3割が起業するというものである。いずれも見事なキャリア・チェンジである。もちろん、これは一種の比喻であるが、大学院は自己と自己のいる世界を客観視するメタ認知の場であるということは間違いない。メタ認知こそ学び直しの意義といえる。